

■ 回想・京都 [昭和] 私史 清水慶三先生遺稿集

私は父に頼まれて、四条烏丸の三菱銀行京都支店に行った。向かいの大建ビルという、京都一、二の大きなビルが米国第六軍司令部になっていて、その隣の、疎開で空き地になっていた大きな広場に、戦車、装甲車、自走砲などのみならず、水陸両用タンクまで並べたて、白昼皓々とライトを着けて走り回るジープを見たとき、大和魂もこの物量には勝てないと痛感した。

しかし、もっと参ったのは、同志社が創立七十周年を迎えた「イブ祭」だった。私は、立命館の学友会の創立メンバーだったので招待され、出席したと思う。

久しぶりにグリークラブやマンドリンクラブの演奏を聞いて、平和を嬉しく思っていたが、プログラム番外で、アメリカの将校たちと同志社の教授たち数人による合唱があった。幼いころ聴きなれた英米の民謡や懐かしいフォスターの歌の数々をすばらしいハーモニーで聞かされ、文化の相違と言いい切れぬ精神的ショックを受けた。レコードでは味わえない、ライブの感動に出会った。特にブラスバンドの演奏は、会場の栄光館が壊れるのではないかと思われる程の、凄い迫力であった。まさに日本敗れたり、であった。十五年戦争はとうとう終わった。

日本敗れたりと、私は簡単に言ってしまったけれど、東山馬町爆撃などで多少の被害を受けつつも、殆ど無傷で敗戦を迎えた京都人として、逆に戦争の悲惨さを書き残す義務があると思う。

三・一〇東京大空襲、三・一二大阪大空襲、それに続く都市へのいわゆる「絨毯爆撃」といわれた、焼夷弾による焦土作戦は、戦争とはいえ余りにもむごいやり方だった。

大阪や神戸が夜間焼きまくられると、翌朝必ず京都の空は真ッ茶に染まり、一時同じ色の雨が降った。その最中を出社する我々の乗る省線（現JR）電車は、焼けただれた防空頭巾と泥まみれの衣服の、殆ど放心状態の男女や孤児になってしまったらしい子供たちで満員だった。車掌によると、この人たちはもう行くあてもなく、ただ京都・大阪間を何往復もしているだけと言うことで

京都市吉祥院図書館



805002065

28042013